

〔猪隈關白記〕建仁二年正月一日丁未、巳時著直衣冠等、見鏡服藥如例。二日戊申、今朝見餅鏡嘗藥酒。三日己酉、鏡藥手水如例。

〔明月記〕元仁二年正月二日癸亥、依吉日見齒固鏡。老後嬾而一日見之即撤

寛喜三年正月一日戊子、巳時許見齒固鏡。

貞永二年正月一日丙午、本尊念誦訖、已後解齋、著冠直衣、見齒固鏡。

〔忠富王記〕明應十年元龜正月二日、看經畢後祝如昨日。中次鏡ニ向、又一獻祝著

〔元長卿記〕永正十八年正月一日、彌陀三尊并兩尊靈之御前、供香并餅等、手自供御膳了。

〔本朝食鑑水〕節氣水、本邦上下、通俗正月元日、平旦新汲井華水、謂之若水、或曰弱水、若者少也、如少壯

之少、以老衰變作少弱之義歟、所謂今曉先汲若水、盥漱沐浴及用茶酒朝炊、則變老作少、送舊迎新也、

古者主水司獻立春新汲水、號曰若水、以供天子之朝餉、言辟一歲之邪氣、此擬神水乎、近世元日亦用

之、下俗不用、立春水也。

〔年中行事故實考正月〕元日 若水 禁中にて、去冬十二月土用已前に、主水司御生氣の方の井を

封じ、人に汲せず、立春の日早旦に土瓶に入、女官に付て奉ることあり、此日若水を飲ば、年中の邪

氣を除くと云傳ふ、是を學びて、今朝くみたる水を若水とて祝ふ也。

〔昔京名所鑑〕若水 去年の御生氣のかたの井をてんじ、ふたをして、其内くまず、立春の日むす

びて、主水司内裏にたてまつれば、朝餉にてきこしめし給ふとなり、年中の邪氣を除くといふ本

文あり、今民家に、元日のものとはかりこゝろうるはあやまれり、春のはじめにくめば、若水とは

申にや。

〔北山隨筆〕若水 今の俗に、正月元日初てくむ水を若水といふは、あやまりにこそ、古は立春の日にくむ初の水を、若水といふなり。

若水